

から氣を付けるのは12月に入つてからであらうと思ふ(鏡徑 10cm 級以上)消失の時は急速に見えなくなるが、太陽の直徑が相當あるため、通過日すぎまで見え、一番見難いのは5日後位らしい。其後再び裏から見た土星環が見え初める。

S—E₃の時 2月號の記事及びバ1ナ1ドの描寫により、その間では、常とは逆に、縮緬環の所と、カシニ分溝の邊が明るい様である。又輪全體も薄くボンヤリ見えて居る。この事に對し二つの理由が擧げられて居る。

(1) 土星本體の光輝を受ける(丁度3ヶ月の光らない所が、地球の反射光で淡く見えると同じ)。

(2) 太陽光が密度の低い環の一部を通過する。

此の第二の理由は、縮緬環の部分が明るい事に對する最も雄辯な解答である。然も此の事が、吾人が直接に眼で見て、土星の輪が微粒子の集りである事を知るものとして(既定事實としたから云ひ方が逆であるが)興味深い。

ともあれ、今、學理上左程問題になる事件ではないが、兎に角珍現象を此の好機に見逃されない様に切望する。

天文臺 第5回談話會記事

昭和11年10月6日14時30分開會—天文臺圖書室にて—

1. 小山秋雄氏：日食コロナ寫眞板の光度測定 (第1報)——去る6月、中頓別に撮影した4枚のコロナ寫眞の光度を倉敷で測定した概報を述べる。測定機はハルトマン測定光度計で、測定機の上へ寫眞板を載せ、前後左右に微動せしめて、その目盛を讀取り、標準光度尺に比較して測定するのである。寫眞板は10センチ平方の全面に涉つて2ミリおきに測定點3000點を選び、之を順序よく夫々の光度を測定して行つた。一測定點の圓の直徑は0.3ミリである。太陽の縁附近はコロナが一様に明るく、標準光度との比較が困難で、測定出来なかつた。測定された光度曲線は太陽の左右に一見非常に滑かな傾きを表してゐるが、尙これを基にして、今後曲線の傾斜につき分析研究、微細な光

度表示法を考究中である。

2. 山本一清教授: New Zealand 天文協會で行はれる星の色指數に就いて 過日來、同國のアマチュア天文協會のクラスト氏との間にこの問題につき、種々觀測法などの交渉が交換されてゐるが、同協會は觀測部に星色課(Star Colour Section)を設け、課報を發行して、意氣込んでゐる。この星の光色問題は分光學の領域に立入らないで、眼視的のもので、豫め協會で畫紙に12色の色彩表を設け、この標準色表を、ランプで照らして、望遠鏡視野にある星の光色とを比較觀測されてゐる。望遠鏡は口径20センチ、15センチ級の反射鏡を使用してゐる。兎に角、この觀測は専門家的なものではないが、同協會では第1、星の光色を觀測すること。第2、星の光色の變化を觀測することを目的としてゐる。これが爲めには使用機を一定しておき、同時觀測をなす必要がある。又色の收差を避けるために反射鏡を使用すべきである。以上の問題は結局、第1、統計學上の好材料を提供するもので、第2、星色の變化は變光星學上の新研究資料となる。之等は即ち、アマチュアには好適の仕事であり、本邦内に於いても、この種の新觀測者の出現を期待するものである。(何れ近日、天界誌上にて觀測指導が發表される筈。)

3. 柴田淑次氏: コロナスペクトルの波長の強さに就いて 前回の談話會にはスペクトルの波長測定を報告されたが、今回はスペクトル波長の強さの測定結果について述べられた。即ち、コロナスペクトル中の $5303 \text{ \AA}$ の波長は最も強く表はれ、太陽像邊上に不規則に分布して居り、次に、 $6374 \text{ \AA}$ の波長は太陽像邊上處々に集中して居り、直接コロナの強く表れてゐる處程、又夫々相當の強さを表して居る。云々。

4. 本田 實氏: 阿里山で觀測した黃道光 海拔2406米の阿里山觀測所で、新高山の高峰の前にみて、夕宵、深夜、早曉に涉り、東西兩天に輝く、南國特有の明るい黃道光を、日濠協同觀測の一地點として、同所へ出張した本田氏の活眼による頼もしい觀測が行はれた。西天には夕宵19時より4回づい、白鳥座の銀河の如き明るい黃道光を認めた。東天には協同觀測の打合せの2時には黃道光を認め難く、光帯のみの觀測に止まつたが馭者座附近の銀河の明るさを認めた。等々。其他、阿里山土産話。(精細、別頁参照)